

語引き助詞研究文献目録 その2

成田徹男 沖久雄 武市恵美子

本目録の方針と構成は次のとおりである。

- 1 明治以降、昭和54年12月までに発表された助詞に関する研究論文、及び単行本を収録対象とした。
- 2 ただし、一般文法書の部分としての助詞研究、及び「てにをは」研究などを対象とした学史的な研究は、収録対象から除外した。

- 3 文献収録については、宮坂和江氏「助詞研究文献総覧」(『国文学』(学燈社)4-9, 昭和34年6月)と国立国語研究所の『国語年鑑』(秀英出版)(昭和29年版から昭和55年版まで)に負うところが大きい。
- 4 本目録の全体構成は以下のとおりである。

1 助詞総論	} その1 収録	⑩ マデ
1. 1 単行本		⑪ その他
1. 2 雑誌論文		3. 1. 3 格助詞比較論
2 作品別助詞研究		① ガとハ
3 助詞各論		② ガとノ
3. 1 格助詞		③ ガとヲ
3. 1. 1 格助詞総論		④ ヲとニ
3. 1. 2 格助詞各論		⑤ ニとヘ
① ガ		⑥ ニとト
② ノ(付:ナ, ツ, イ)		⑦ ニとデ
③ ヲ		⑧ ヨリとカラ
④ ニ		3. 2 係助詞
⑤ ヘ		3. 3 副助詞
⑥ ト	3. 4 並立助詞	
⑦ デ	3. 5 準体助詞	
⑧ カラ	3. 6 終助詞	
⑨ ヨリ	3. 7 接続助詞	

このうち、今回の「その2」では、「3.1.2 格助詞各論」及び「3.1.3 格助詞比較論」を収録した。

- 5 本目録の配列は、原則として最下位分類項目ごとに発表年順とした。

同一題目で分載または連載のものは、初出の箇所併記した。

記載項目は、左より、①執筆者名、②論文題目または書名、③所収文献及び巻号または発行所、④発表年月、の順である。

目録に記載するにあたって、現物をみることで

なかったものもあり、収録もれもあるかと思われる。大方の御教示をお願いする。

なお、今回収録の格助詞関係については、題目はひとつの助詞のみを示しながら実際は他の助詞と対照した記述を中心としたもの、ふたつの助詞をとりあげても比較ではなく別々に論じられているもの、などの分類項目に含めるか疑問のものがあった。今回は、題目を優先して機械的に分類してあるので、例えば「ガとノ」の比較については、3.1.3 格助詞比較論②だけでなく、3.1.2 の①、②をも参照されたい。

※ 3 助詞各論からは、以下の雑誌の特集号に含まれている辞書形式による個別助詞についての記述は除外されている。あわせて参照されたい。

○ 国文学 (学燈社) 4-9	古典文法の第二総合探求・助詞篇	昭34-6
○ 国文学 (学燈社) 12-2	特集 助詞のすべて	42-1
○ 解釈と鑑賞 (至文堂) 23-4	古典解釈のための助詞	33-4
○ 月刊文法 (明治書院) 2-5	特集 研究成果を文法指導に採り入れるポイント 助詞	45-3

※※ 次の論文集に再録 (加筆・訂正されたものもある) されている論文には該当するアルファベットを著者名の前に付した。A~Kは「その1」を踏まえたものである。

A 湯沢幸吉郎 (同上)	国語学論考 同上 (復刻) (著作集2)	八雲書林・上田屋書店 勉誠社	昭15-2 54-8)
B 石垣 謙二	助詞の歴史的研究	岩波書店	30-11
C 松村 明	江戸語東京語の研究	東京堂	32-4
F 永野 賢	伝達論にもとづく日本語文法の研究	東京堂	45-5
J 三上 章	三上章論文集	くろしお出版	50-6
K 佐伯 哲夫	語順と文法	関西大学出版・広報部	51-12
L 小林 好日	国語学の諸問題	岩波書店	16-8
M 松村 明	洋学資料と近代日本語の研究	東京堂	45-8
N 本位田重美	国語文法論への道	笠間書院	50-12
O 吉川 泰雄	近代語誌	角川書店	52-3
P 服部他 (編)	日本の言語学3 文法II	大修館	53-6
Q 川本他 (編)	日本の言語学5 意味・語彙	大修館	54-1
R 鎌田 良二	兵庫県方言文法の研究	桜楓社	54-2
S 仁田 義雄	語彙論的統語論	明治書院	55-3
T 言語学研究 会 (編)	日本語文法・連語論 (資料編)	むぎ書房	58-5

3.1.2 格助詞各論

① ガ			
○ 今泉 忠義	源氏物語に於ける助詞「が」の用法	国学院雑誌	昭6-7, 7-1
○ 新名 登	「が」のつく客語	国文学誌	6-11, 12
○ 吉沢 義則	所謂「ヲ」に通ずる助詞「ガ」に就いて	「金沢博士還暦記念 東洋語学乃研究」	7-12
○ 吉沢 義則	再び所謂目的格をあらはす「が」について	国漢研究	7-11
○ 吉沢 秀雄	上代に於ける格助詞「が」の用法	国文学攻2-2	11
○ 佐久間 鼎	現代日本語法三九——「格」といふこと、格助詞「が」——	教育・国語教育	13-7
○ 小林 好日	助詞「が」の表現的価値	国語と国文学15-10	13-10
○ B 石垣 謙二	主格「が」助詞より接続「が」助詞へ	国語と国文学21-3,5	19-3, 5
○ 高辻 義胤	「名詞+が」は対象語格なりや	愛媛国文研究2	28-3
○ 橋 誠	河内本源氏物語の語法(一)——主格特示の「が」について——	国学院雑誌	28-11
○ N 本位田重美	宇治拾遺物語における蔑称の「が」について	日本文芸研究7-4	30-12
○ 宮地 敦子	誤用——「ガ」を中心として——	国語国文25-1 (257)	31-1
○ 竹川 久雄	文法指導のむずかしさ——「水が飲みたい」の文節の関係を中心に——	国語教室52	31
○ 安田喜代門	助詞「が」の研究——勅撰集の詞書の中から——	国学院雑誌57-7	31-12

此島 正年	古代における格助詞「が」	国学院雑誌57-7	昭31-12
神作 光一	助詞「が」に関する研究序説	文学論藻7	32-6
山田 巖	「水が飲みたい」という言い方の源流	言語生活72	32-9
松村 明敏	万葉集における「が」助詞の一考察	国文学	33-11
寺田 泰政	「いわゆる同格的用法」の「が」について	国語研究(国学院大)8	33-11
佐伯 哲夫	「雨が降る」といふ言ひ方	国文学(関西大)	34-4
両角 克夫	文法の論理における主語の機能	信州大文理学部紀要13	38
木之下正雄	条件節の主格表示について	研究紀要(鹿児島大)15	38-12
根本今朝男	「が格」の名詞と形容詞とのくみあわせ	ことばの研究(国立国語研究所)2	40-3
山崎 良幸	助詞「が」の機能——特に主格を表わすとされている「が」について——	高知女子大國文1	40-5
我妻多賀子	助詞「が」の通時的考察	学習院大文学部研究年報13	42-2
佐藤 俊子	格助詞「が」の尊卑関係—枕草子・源氏物語を中心に—	藤女子大國文学雑誌2	42-6
三上悠紀夫	「愚管抄」における助詞「が」の資料	福井県立藤島高校研究集録	42-11
三上悠紀夫	『愚管抄』における助詞「が」について——所謂連体格について——	国語国文学(福井大)13	43-11
我妻多賀子	主格助詞「が」の発達	学習院大國語国文学会誌15	47-1
早川 通介	日本語の主語について	「現代言語学」(服部先生退官記念論文集)	47-3
田村すゝ子	対象語に「が」を伴わしめる語について	早稲田大語学教育研究所紀要10	47-3
井能 好三	が辞考(助辞性相論の1)「が」は本来主格辞ではない	文芸広場(公立学校共済)22-9	49-9
井原美紗子	格助詞「が」についての試論 近松の作品より	清泉女子大紀要22	49-12
川瀬 生郎	格助詞「が」の用いられる表現と文形式について	日本語学校論集2	50-2
佐藤ちゑ子	主題化に関する主格名詞句の特性について	「佐伯梅友博士喜寿記念国語学論集」	51-12
市ヶ谷幸子	が格の名詞と連語	国語国文論集(学習院女子短大)6	52-2
斉藤由美子	主格助詞「が」の発生——無住法師の作品を中心に——	「本位田重美先生定年記念論文集 地域と文化」	52-3
大野 晋	主格助詞ガの成立(上, 下)	文学45-6, 7	52-6, 7
② ノ (付: ナ, ツ, イ)			
岡倉由三郎	主格を示す本来の辞	帝国文学6-2 (26)	明33-2
井上隅川子	俳句に於ける助詞「の」の考察	石楠	昭7-5
木枝 増一	「の」に関する二つの疑問	国語国文	9-11
北島 霞江	「つ」助詞の用法から見た蜻蛉・秋津島・明津御神考	国語解釈	12-5
石田 春昭	イは主格助詞にあらず	国語国文	12-11
佐久間 鼎	現代日本語法四〇——格助詞「の」について	教育・国語教育	13-8
阪倉 篤義	比喩的枕詞—体言に「の」の添はりたるものについて—	国語国文	15-12
吉沢 義則	格助詞「の」の用法について	国語国文	22-2
C松村 明	「の」の一つの用法について	日本の言葉1-3	22-8
石原 六三	古代日本語の格助詞と称せられる「イ」と朝鮮語の格助詞「ali」について	天理大学学報	25-11

土部 弘	連体格から連用格へ—所謂「に」に通じる格助詞「の」の一解—	国文学	昭26— 6
土部 弘	提示格の「の」の或る場合	国文学	28— 8
小林 芳規	謂わゆる主格助詞「い」は副助詞と考うべきである	国語(西東社) 9 (2—2・3・4)	28— 9
稲垣 瑞穂	古訓点にあらはれた星点の「イ」	国語国文22—11 (231)	28—11
武田 祐吉	助詞「イ」の性格	国学院雑誌	28—11
木之下正雄	源氏物語におけるヲに通うノについて	鹿児島大教育学部 教育研究所研究紀要	28—12
瀬良 益夫	上代の感動表現「い」について—格助詞「い」の再検討—	解釈	31— 4
浅見 徹	「の」の歴史—その一として「上代」—	国語国文25—8(264)	31— 8
土部 弘	格助詞「の」における語法弛緩	国語研究(国語文化研究所) 13	
三宅 清	「の」主格の発達について	国語国文25—10	31—10
三木 幸信	助詞「の」の一つの見方	女子大國文 6	32— 6
宮田和一郎	「形容詞の語幹+の」について	解釈 3—8 (28)	32— 8
清田 秀博	初霜のおきまどはせる—古今集の助詞「の」の一用法—	国文学	32— 8
金沢庄三郎	朝鮮語と助詞イ	国学院雑誌	32— 9
稲垣 瑞穂	上代語と訓点語—「い」について	武庫川女子大紀要 6	33
三吉 陽	格助詞「の」の一用法	愛媛国文研究 7	33— 3
桜井 茂治	助詞「の」のアクセント—倭・漢両語への接続の史的考察	国学院雑誌	33— 5
木之下正雄	題目提示の「の」について	解釈 4—6	33— 6
中川 浩文	助詞「の」「が」「つ」の原初的性格について—助詞の成立事情に関する一、二の考察(上)—	女子大國文10	33—10
井手 至	「の」〈副体語・句〉の機能	人文研究(大阪市立大) 9—7	33— 8
三宅 清	古語における「の」主格の用法	東京大教養学部人文科学科紀要	33—11
塚原 鉄雄 塚原 幸子	連体格を構成する助詞二つ—格助詞〈な〉と格助詞〈つ〉と—	万葉30	34— 1
小林 芳規	助詞イの残存 平安時代の使用者と用法	東洋大紀要13(人文・社会・自然)	34— 5
浅見 徹	水の飲みたい者	国語国文28—10(302)	34—10
佐藤 宣男	助詞「の」の用法—所謂、指定格の「の」について	国語学研究 2	37— 8
佐伯 梅友	助詞「の」をめぐる	大東文化大紀要1-1	38— 3
江木 弘	同格「の」	国文学会報 9	38—10
桜井 光昭	「名誉の」と「名誉な」	「口語文法講座 3 ゆれている文法」	39—11
奥津敏一郎	「の」のいろいろ	「同上」	39—11
岩井 良雄	中古における助詞「の」	国文学論考 2	40— 6
中沢 政雄	現代国語学(7) 本の忘れた人	国語教育科学 7—1	41— 1
浅見 徹	単文主格の発達—中古仮名文学中の助詞「の」—	国語国文35—5(381)	41— 5
青木 伶子	問題となる助詞	「講座 日本語の文法 3 品詞各論」	42—10
増淵 恒吉	「の」「に」「と」「さるは」について	「同上 4 文法指導の方法」	42—12
鈴木 康之	名詞と名詞とのくみあわせ—の格の名詞のばあい—	東京成徳短大紀要 2	43— 5
野口 玲子	「の・に」について	たより 32	43—12

安田喜代門	主格助詞イについて	国語研究(国学院大)27	昭44-3
尾崎 暢映	継ぎて見すらし——「の」連体形について——	文法2-1	44-11
尾崎 暢映	序詞の発想——助詞「の」をめぐって——	文法2-2	44-12
氏家 洋子	文論的考察による接続助詞「の」の設定	国文学研究(早稲田大)41	44-12
青木 伶子	連体格助詞「の」の一用法——紫の句へる妹・例のうなづく——	成蹊国文3	45-3
吉田 金彦	現代文における「の」の意味用法	文法2-11	45-9
北条 忠雄	「の」の語源は「な」か	文法2-11	45-9
K佐伯 哲夫	「の」と「を」——本の読める・本を読める——	文法2-11	45-9
阿刀田稔子	てにをは随想(6)——「の」について——	日本語教育研究2	45-12
坂本元太郎	連体格助詞「の」の周辺〈体言+の……連体形〉の構文における「の」の問題点	札幌大教養部札幌女子短大紀要2	46-3
渡辺 英二	助詞「の」の一用法「この君に奉らむの御心に」	国語国文研究50	47-10
橘 誠	源氏物語の語法——同格の助詞「の」の用法	「今泉博士古稀記念国語学論叢」	48-3
前田 洋文	日本語格助詞「の」とそれに対応する英語表現——英作文指導に関連して	群馬大教育学部紀要 人文社会 23	49-3
中西 進	「の」の思考	海7-5	50-5
此島 正年	格助詞「の」の論 その提示用法	国学院雑誌76-6(818)	50-6
北原 保雄	「は」は「の」を代行しない	言語4-8	50-8
大木 正義	連体助詞「の」の一用法——渡辺実氏の立場からの近づき	「佐伯梅友博士喜寿記念 国語学論集」	51-12
堺 則彦	助詞「の」について	解釈23-4	52-4
平河内健治	「ノ」の機能について	英語教育26-9	52-11
鶴岡 昭夫	体言と「の」の連鎖について	国語学111	52-12
森 昇一	助詞「の」の連体格の一用法	野州国文学22	53-10
鈴木 康之	ノ格の名詞と名詞とのくみあわせ(1)~(4)	教育国語55, 56, 58, 59	53-12 ~54-12
木之下正雄	同格助詞の「の」について	鹿児島女子短大紀要14	54-
③ ヲ			
松尾捨治郎	助辞「を」の検討	国学院雑誌	昭8-4
佐久間 鼎	現代日本語法四一——格助詞「を」について——	教育・国語教育	13-9
松尾 捨	平安初期に於ける格助詞「を」	国語と国文学15-10	13-10
佐々木雪靈	助辞「を」に著く他動詞性動詞	青虹	13-10
中尾 徳蔵	まげる所の「を」	あらたま	14-12
佐伯 梅友	助詞「を」について	文学	17-10
奥里 将建	和行古代B音史論——語法問題を解決しつつ——	国語国文	17-5
奥里 将建	ヲ格の b m n ng 推移	方言研究	19-7
松尾 捨	客語表示の助詞「を」に就いて	「橋本博士還暦記念会国語学論集」	19-10
岡本 彦一	「あなたを好き」談義	国語研究	25-11
C松村 明	「水を飲みたい」という言い方について	東京女子大学論集 1-2	26-3
福島 邦道	掇解新語の助詞「を」について	国語国文21-4(213)	27-5
浦部 重雄	源氏物語における助詞「を」の用法について	日本文学研究	27-6
此島 正年	助詞「を」の歴史	「金田一博士古稀記念言語民俗論叢」	28-5

諏訪 嘉子	万葉集における助詞「を」	万葉13	昭29-10
広井 玲子	宇津保物語に於ける客語表示の「を」について	日本文学(東京女子大) 9	32-10
小山 敦子	頻度から見た目的格表示の「を」の機能と表現価値—源氏物語とその先行作品を資料として—	国語学 33	33- 6
芳野 孝子	助詞「を」について	香椎潟 4	33- 7
水谷 静夫	「話を終わる」と「話を終える」	「口語文法講座 3 ゆれている文法」	39-11
白石 大二	青春を生きる	「同上」	39-11
新垣 幸得	万葉集における格助詞「を」をめぐって	研究紀要(山形県米沢東高) 2	39-12
後藤 克巳	「本を読む」と「道を歩く」	国文学35	40-11
鎌田 広夫	天草本平家物語の助詞「を」	語学文学 6	43- 3
木之下正雄	対格表示の「を」について	鹿児島大教育学部 研究紀要19	43- 3
奥田 靖雄	日本語文法・連語論——を格の名詞と動詞とのくみあわせ(1)~(9)	教育国語12, 13, 15 20, 21, 23, 25, 26, 28	43- 3 ~47- 3
大久保玲子	一年生における補語「を」の指導	児言研国語 19	44- 3
西崎 享	「□ヲ□ミ」の構文をめぐって——「ヲ」「ミ」をどのように考えるか——	解釈16- 5	45- 5
松下 史生	判決主文の言い方[「原告の請求を棄却する」「原告の請求は棄却する」——「ヲ」「ハ」の語性について]	書記官 65	45-10
福渡 淑子	連語について(1) 名詞+「を」+動詞の型	情報処理学会C L 委員会資料 '71- 3	46- 5
鎌田 良二	中古文における助詞「を」について その解釈をめぐって	甲南女子大研究紀 要 8	47- 3
福渡 淑子	連語(名詞+「を」+動詞)について	情報処理学会C L 委員会資料 '72- 4	47- 5
塚原 鉄雄	定家卿と拾遺集——格助詞「を」と係助詞「も」と	「谷山茂教授退職記 念国語国文学論集」	47-12
妙摩 光代	字訓の中の対格	「今泉博士古稀記念 国語学論叢」	48- 3
鈴木 忍	助詞「を」をめぐって	日本語学校論集 1	49- 3
神島 武彦	「を」格の表示について 広島市域方言の場合	広島大方言研究会 会報22	49- 4
岩下 武彦	万葉集における助詞「を」の用法と表記 人麻呂歌集へのアプローチ	国文学研究資料館 紀要 2	51- 3
松元季久代	「を」の格表示機能の起源について 対象の限定	国文(お茶の水女 子大) 45	51- 7
桑山 俊彦	格助詞「を」に「をもて」の意味はないか 「扇をさしかくす」とも関連して	国語学研究と資料 1	51-12
④ ニ			
藤原 勉	受身の於(に)に就て	国漢	10- 1
森本 治吉	標的を示す「に」助詞の万葉集中の実例に就いて	国語解釈	11- 2
佐久間 鼎	現代日本語法四三・四四——格助詞「に」について——	教育・国語教育	13-11, 12
富永 貢	土屋文明全歌集中の助詞「に」に就ての統計調査	潮汐	30- 8
荒 外也	文明短歌の助詞「に」について	潮汐	30- 8
伯子福右衛門	枕草子における「に」止めの語法	解釈	33- 8
富山 奏	助詞「に」と切字——芭蕉の発句「蓬萊に聞ばや伊勢の初便」の解釈をめぐって——	連歌俳諧研究	33-12

島田 勇雄	映画を見に行く・工場を見学に行く	「口語文法講座 3 ゆれている文法」	39-11
森田 和男	格助詞「に」の一用法——秋風に聞ゆる——	国語と教育 '65	41-1
長野 照子	「て」と「に」の或る近付き	梅花女子大文学部 紀要 5	43-12
石綿 敏雄	「名詞+助詞「に」+動詞」の表現構造の解析	情報処理学会 C L 研究委員会資料 '71-2	昭46-5
石綿 敏雄	助詞「に」を含む動詞句の構造	「電子計算機による国 語研究Ⅳ(国研報告46)」	47-3
阿刀田稔子	〈質問箱〉動詞連体形+「には」「のに」「のには」について	日本語教育研究 8	48-12
山口 康子	上代における同一動詞反復形式「に」を介する形式の成立要因について	長崎大教育学部人 文科学研究報告24	50-3
山口 康子	「ニ」を介する同一動詞反復形式の史的考察——今昔物語集まで	語文研究39・40	50-6
山口 康子	「に」を介する同一動詞反復形式の流動「いや」から「ただ」へ	長崎大教育学部人 文科学研究報告25	51-3
工藤 力男	上代における格助詞ニの潜在と省略	国語国文46-5(513)	52-5
青木 伶子	所謂副詞語尾の「に」について——格助詞の下位分類に及ぶ	「松村明教授還暦記 念国語学と国語史」	52-11
向井 寛	「に」のある用法について	華頂短大研究紀要18	53-11
大木 隆二	格助詞「ニ」にみる文型のながれ	日本語学校論集 6	54-3
⑤ へ			
佐久間 鼎	現代日本語法四二——格助詞「へ」の用法	教育・国語教育	13-10
B石垣 謙二	助詞「へ」の通時的考察	文学	18-10
青木 伶子	移動性動作の目標を示す助詞「へ」について	国文(お茶の水女子大)	29-6
Q杉井 鈴子	助詞「へ」の成立	国語学 19	29-12
中川 浩文	助詞「へ」の性格の再検討—その成立の問題にふれて—	女子大國文 15	34-10
阿刀田稔子	てにをは随想——から・へ——	たより 29・30	42-6, 12
原口 裕	近代の文章に見える助詞「へ」	北九州大文学部紀要 4	44-3
⑥ ト			
物集 高見	とといふ互爾乎波	国学院雑誌	明27-11
森本 治吉	万葉集に於ける「と」助詞の用法(一)	アララギ 25-10	昭7-10
森本 治吉	万葉集に於ける「と」助詞の用法(二)——格助詞の「と」及びその共同的用法について——	アララギ 25-12	7-12
安田喜代門	助詞「ト」の用法上の一疑問	日本文学	10-1
佐久間 鼎	現代日本語法四五——格助詞「と」の含蓄と用法——	教育・国語教育	14-1
森重 敏	句格・言・第二係結——上代の辞「と・て」——	国語国文	25-9
松尾久美江	万葉集に於ける助詞「と」について	奈良女子大國文学会誌	32-2
慶野 正次	格助詞「と」の接続——徒然草の文法研究——	武蔵野文学 3	32-3
麻生 耕三	時枝文法「と」の本質	愛媛国文学研究	33-3
間瀬 勇造	助詞「と」を理解させることと文章表現指導	作文と教育15-4	39-4
高羽 四郎	「となる」の用法	国文学研究 3	42-11
武市恵美子	連用成分「——ト」の構文論的考察	国語学 116	54-3
豊田 豊子	〈特集・文字を書く〉発見の「と」	日本語教育 36	54-2
⑦ デ			
佐久間 鼎	現代日本語法四七——格助詞としての「で」	教育・国語教育	14-3
吉野 忠	「ニシテ」から「デ」へ	高知大教育学部研 究報告 16	40-1

阿刀田稔子	「で」の用法について	日本語教育研究10	49-12
⑧ カラ			
T 渡辺 義夫	名詞と動詞のくみあわせ—名詞が「～から」のばあい—	言語研究会ニュース15	34
塚原 鉄雄	「から」の語源 栗原説への疑問から	日本上古史研究7-4	38-4
奥津敬一郎	「マデ」「マデニ」「カラ」—順序助詞を中心として—	日本語教育9	昭41-12
阿刀田稔子	てにをは随想——から・へ——	たより 29・30	42-6, 12
S 仁田 義雄	連語 [名詞+カラ+用言] について グラマティカルな連語になる条件の考察を中心にして	国語国文42-7(467)	48-7
T 荒 正子	日本語文法・連語論 から格の名詞と動詞とのくみあわせ(1), (2)	教育国語40, 41	50-3, 6
小矢野哲夫	起点格と「から」	国語学研究 16	52-6
R 鎌田 良二	起点助詞「から」について	国学院雑誌78-11	52-11
⑨ ヨリ			
渡辺 義夫	日本語の「比較」——「より」の用法	言語学論叢 6	39-2
林 巨樹	「行くしかない」と「行くよりほかない」	「口語文法講座 3 ゆれている文法」	39-11
大坪 併治	助詞ヨリのある場合——訓点語を中心に——	国語学 66	41-9
我妻多賀子	助詞「より」の通時的考察	学習院大文学部研究年報14	43-2
松本 泰丈	「——より」の問題点	国語国文論集 3	49-2
阿部 健二	<より>の持つ意味の一側面——「ゆ」→「より」への展開を通して	「松村明教授還暦記念国語学と国語史」	52-11
⑩ マデ			
O 吉川 泰雄	格・副助詞「まで」	国語研究(国学院大) 6	32-4
F 永野 賢	「まで」と「までに」	「口語文法講座 3 ゆれている文法」	39-11
奥津敬一郎	「マデ」「マデニ」「カラ」——順序助詞を中心として——	日本語教育9	41-12
野原 三義	<まで>について	国際大学国文学 3	46-9
T 荒 正子	日本語文法・連語論 まで格の名詞と動詞とのくみあわせ	教育国語 50	52-9
⑪ その他			
田中重太郎	「にて」の語法	平安文学研究 16	29-12
吉野 忠	「ニシテ」から「デ」へ	高知大教育学部研究報告 16	40-1
浜田建治郎	格助詞「にて」の形成と言語における交替現象	語文研究(九州大) 29	45-11
鈴木 泰	指定辞トシテ, ニシテの句格	「松村明教授還暦記念国語学と国語史」	52-11

3.1.3 格助詞比較論

① ガとハ

G 松村 明	主格表現における助詞「が」と「は」の問題	「現代日本語の研究」	昭17-10
R 有賀 憲三	主語に附く場合の助詞「が」と「は」の用法	日本語	19-10
中島 文雄	格助詞「が」と「は」について	「市河博士還暦祝賀論文集第二輯」	22-7

三宅 武郎	中学の文法学習指導案第一時——「は」の文と「が」の文——	コトバ	23-12
速川 浩	助詞はがの英語学的考察	小樽商大人文研究	28-1
J三上 章	ハとガの使い分け	語文3	28-3
榎垣 実	助詞「は」と「が」の問題	近畿方言4	昭28-7
大久保忠利	「は」と「が」との教えかた	「三年四年現場の国語教育」	29-4
斯林不二彦	「浮世床」を通して見たる主語指示の助詞「が」と「は」	試論	30-7
船田 逸夫	国語「～は」「～が」と英語の表現	英文法研究1-10	33-2
石井 光治	英米人のみた格助詞「は」「が」	英文法研究2-3	33-6
松尾 拾	ハとガ	「講座現代語6 口語文法の問題点」	39-1
浜田 敦	「が」と「は」の一面——朝鮮資料を手がかりに——	国語国文33-4, 5 (368,9)	40-4, 5
M松村 明	欧米人の「は」「が」観——ロドリゲスからチャムブレンまで——	日本語教育7	40-9
J三上 章	「は」と「が」の研究法	日本語教育7	40-9
F永野 賢	文章における「が」と「は」の機能	日本語教育7	40-9
浅野 鶴子	実践面における「が」と「は」	日本語教育7	40-9
金田一春彦	「は」と「が」の使い分けについて	日本語教育7	40-9
尾野 秀一	「は」と「が」の機能・相違について	日本語教育8	41-3
小山 敦子	「の」「が」「は」の使い分けについて——展成文法理論の日本語への適用——	国語学66	41-9
井上 寿老	言語の論理(下の中)——文章上下の呼応の問題の一環としての主語をめぐる助詞「は」「が」に関する諸問題——	大分県立芸術短期大学研究紀要6	41-12
大塚喜代子	主格につく助詞“は”と“が”——長沼読本巻一第一部の段階による——	たより30	42-12
増井 金典	「は」と「が」の違いをどのように生徒に指導すればよいか	会誌(滋賀県高校国語教育研究会)42	43-3
増井 金典	「が」と「は」について	滋賀大國文6	43-12
Kuno, Susumu	Theme, Contrast, and Exhaustive listing — Wa and Ga in Japanese —	語学教育289	44-夏
山崎 良幸	「が」と「は」は区別されるか	文法2-11	45-9
井能 好三	文疵考 主語をめぐるはとがに関するもの	文芸広場19-6	46-6
望月 孝逸	日本語の表現の様式について ハとガの意味的機能	千葉大学留学生部研究報告7	47-3
前田 洋文	日本語助詞「が」, 「は」に関連する英語の機能について	群馬大学教育学部紀要(人文・社会)21	47-3
井能 好三	は・が弁	文芸広場20-6	47-6
森田 良行	文型と助詞——「は」「が」の用法を中心に	講座日本語教育8	47-7
三宅 武郎	「は・が」の構造	国学院雑誌73-11	47-11
尾上 圭介	文核と結文の枠「ハ」と「ガ」の用法をめぐる	言語研究63	48-3
浜田 敦	“か”と“は”の一面	「論集日本文化の起源5 日本人種論・言語学」	48-11
増井 金典	「が」と共通する「は」「が」と「は」について(2)	滋賀大國文11	49-1
阪田 雪子	「ハ」と「ガ」はどう違う?	「新・日本語講座2 日本文法の見えてくる本」	50-3

大久保忠利	ハとガの常識を少し越えて 文法を手のひらにのせてみる	春秋 166	50-7
大野 晋	助詞ハとガの機能について 現代日本語の基本的構文の意味	文学 43-9	50-9
川本 茂雄	フランス語学・一般言語学・国語学 ガとハに関連して	言語 4-10	50-10
有馬 俊子	教科書「日本語の基礎」に提出されている助詞「は」と「が」について	研修 176	昭50-10
斎藤由美子	「ハ」と「ガ」に関する一考察 東洋諸語との比較	古典と民俗 2	51-6
増井 金典	「が」と「は」について(3) 相違点を対照表にまとめる	滋賀大國文 14	51-12
尾上 圭介	[資料]「ハ」と「ガ」研究文献	言語 6-6	52-6
柳 辰男	主格表現における「は」と「が」の区別能力の発達—母国語指導アプローチの試み(1)	学芸国語国文学 14	53-2
坂谷 裕子	助詞「は」と「が」について	昭和学院国語国文11	53-3
鈴木 博	国語教材から二題(1)戯曲『おふくろ』の「行きまっせ」(2)「三四郎」の「が」と「は」	滋賀大國文 16	53-12
安達 隆一	文章における「は」と「が」 人物提示を中心として	国語国文学報 34	54-1
山崎 幸雄	名詞構文におけるハとガについての覚え書き	富山大人文学部紀要 2	54-3
斎藤由美子	場と言語表現「ハ」と「ガ」の問題を中心に	古典と民俗 8	54-4
秦野 悦子	子どもにおける助詞「は」「が」の獲得の研究	教育心理学研究 27-3	54-9
安達 隆一	文章における文の時間性 「は」と「が」の関連において	東海学園国語国文 16	54-9
関 伊統	日本語「は」・「が」とインドネシア語の対応	語学研究 20	54-11
増井 金典	「が」と「は」について(4) 大野晋氏の仮説(未知・既知説)批判	滋賀大國文 17	54-12
② ガとノ			
A 湯沢幸吉郎	「の」「が」を伴う句の一形式——修飾法の一——	国語教育 14-2	4-2
佐伯 梅友	主語につく「の」と「が」について	「万葉学論纂」	6-3
森田 武	日連上人遺文に見える格助詞「の」「が」の用法	国語研究	13-10
石垣 謙二	語法より観たる今昔物語——「が」「の」の用法二三について——	国語と国文学 18-10	16-10
森重 敏	修飾語格小見——上代の助辞「な、に、の、が」(1)~(3)	国語国文 17-1,3,4	23-2,5,7
鈴木 真咲	射等籠箭四問——万葉地名における同格の助詞「の」及び「が」の用例などについて——	文学	25-9
西宮 一民	万葉集の助詞「が」「の」の或る場合	万葉 1	26-10
青木 伶子	奈良時代に於ける連體助詞「ガ」「ノ」の差異について	国語と国文学 29-7	27-7
山崎 久之	助詞「の」「が」の表現的価値——尊卑説批判——	群馬大学紀要 3	28-3
岡田 正世	「雨の降る日」と「雨が降る日」	国語国文学(福井大)	29-7
浅見 徹	記紀の古さ——格助詞「の」「が」の用法から——	万葉 22	32-1
高野 忠興	助詞「の」「が」——主語をあらわす用法——	北海道学芸大紀要	32-8
舟岳 章子	室町時代の「の・が」—その感情価値表現を中心に—	国語国文 27-7	33-7
中川 浩文	助詞「の」「が」「つ」の原初的性格について——助詞の成立事情に関する一、二の考察(上)——	女子大國文 10	33-10
此島 正年	古代における主格助詞「が」「の」	弘前大人文社会 16 国語国文学篇 II	34-2
Miyake, Takeo	「の」と「が」の敬語法	実践国語教育 246	36-2
小出 民子	古事記における主格助詞「の」と「が」の用法・格助詞「の」と「が」の主格用法について——徒然草——	国語学研究報告(長野県短大) 1	38-2
佐渡 利女	格助詞「の」と「が」の主格用法について——古今和歌集——	国語学研究報告(長野県短大) 1	38-2

桑原 淑子	古代における待遇表現—格助詞「の・が」の研究—	国語国文学(岐阜大) 2	38- 5
野呂 佳江	『宇治拾遺物語』における国語学的研究—助詞「の・が」の表現価値について—	語学と文学 6, 7	38- 8
田中 章夫	「天気がいい」と「天気のいい」	「講座現代語 6 口語文法の問題点」	39- 1
鎌田 良二	「世間胸算用」の「の・が」	甲南国文 12	昭39- 2
山田 瑩徹	三代集の詞書にみえる「が」と「の」—意識の上から—	りてらえやばにかえ 6	40- 3
鎌田 良二	「世間胸算用」の「の・が」	三重県方言 22	41-12
東郷 吉男	平安時代の「の」「が」について—人物をうける場合—	国語学 75	43-12
春日 正三	日蓮聖人ご遺文の国語学的研究(3)—助詞「の・が」の待遇意識—	立正大人文科学研究 所年報 7	44-12
山田 瑩徹	醒睡笑における「が」と「の」	語文(日本大) 33	45- 5
長谷川 清喜	「が」「の」の類似と相違	文法 2-11	45- 9
小沢 重男	「が」「の」の語源) アルタイ系言語由来説	文法 2-11	45- 9
風間 力三	「が」「の」の変遷	文法 2-11	45- 9
増淵 恒吉	「が」「の」の指導	文法 2-11	45- 9
橋 誠	源氏物語の語法 主語特示の助詞「の」「が」の尊卑(「が」を中心に)	新国学 4	45-12
野原 三義	「百控琉歌」の助詞—「の・が」の部—	国際大学国文学 1	45-12
中村 隆彦	万葉集に於ける連体格助詞「が」「の」に関する一 小論 「何」の訓みをめぐって	旭川工業高専研究 報告 8	46- 3
Harada, S.I.	Ga-No conversion and ideolectal variations in Japanese	Annual Bulletin 5	46- 6
高橋 俊三	「おもろさうし」の助詞(2)「が」と「の」の相違	国際大学国文学 3	46- 9
桑山 俊彦	室町・江戸初期における「の」と「が」—待遇表現面を中心に—	文芸と批評 3-9,10	47- 8
千葉 昭治	「が」と「の」の様相 その上代	秋田語文 2	47-12
桑山 俊彦	室町・江戸初期における「の」と「が」—文構造面を中心に—	国文学研究(早稲田大) 49	48- 2
北原 保雄	助詞「の」と「が」について	「きのふはけふの物語研究及び総索引」	48- 2
山口 康子	古本説話集「目録」訓読についての一視点 人物をうける「の」「が」	文学・語学 66	48- 3
福田 益和	古本説話集目録の訓読について「の」「が」補読に関する山口康子・福田益和両氏の論に対して	文学・語学 68	48- 8
佐藤 定義	助詞「の」「が」の一考察—栄花物語「月の宴」を分析して—	相模女子大紀要 38	49-12
桑山 俊彦	江戸後期における格助詞「の」と「が」の待遇価値	国語学 104	51- 3
原田 信一	Ga-No Conversion resisted; A reply to Shibatani	言語研究 70	51-11
山内洋一郎	主格の「の」「が」と古典の理解	奈良教育大国文研究 と教育 2	53- 2
友田英津子	が/の 交替変形について	武蔵野女子大紀要 13	53- 3
桑山 俊彦	江戸後期における格助詞「の」と「が」 文構造面を中心に	群馬大教育学部紀 要人文社会 28	54- 3
上野 尚美	道の知らなく 助詞「の」「が」の特殊な場合	古典と民俗 8	54- 4
福田 益和	古今著聞集の研究 助詞「の」「が」の用法(中,下)	長崎大教養部紀要 人文19, 20- 1	54- 9

③ ガとヲ

今泉 忠義	「を……である」「が……である」考	コトバ	12- 3
白石 大二	格助詞「が」と「を」との誤用	国語教育誌	16- 8
沢瀉 久孝	「我が」と「我を」と	短歌研究	18- 1
寛 五百里	「お茶が飲みたい」か「お茶を飲みたい」か	華北日本語	19-10
Miyake Takeo	およめにもらいた話——「が」と「を」の問題——	実践国語	33- 3
阿部 源蔵	「が——たい」から「を——たい」へ	国学院雑誌59-10・11	昭33-11
山田 巖	「水が飲みたい」と「水を飲みたい」	「講座現代語6 口語文法の問題点」	39- 1
黒田 重幸	ガ、ヲ及びニについて	国語学 63	39-12
阿刀田稔子	てにをは随想——「を」「が」について——	たより 31, 32	43- 6, 12
田村すゝ子	日本語の他動詞の希望形・可能形と助詞	早稲田大語学教育研究所紀要8	44- 9
白石 大二	格の転換とイディオムの成立——〇格・ヲ格・ニ格の分裂とガ格の成立——	文法 2- 4	45- 2
鈴木丹士郎	「が」と「を」——「文法が好き」「文法を好き」	文法 2-11	45- 9
森田 良行	「本が置いてある」と「本を置いてある」	「講座正しい日本語5 文法編」	46- 3
山口 幸二	日本語の格的表現における諸問題(1) 「を」格、「が」格についての若干の考察 所謂アルタイ系との関連において	日本語・日本文化(大阪外国語大) 3	47- 3
大江 三郎	願望のタイの前でのヲとガの交替	文学研究(九州大) 70	48- 3
村木新次郎	「水を飲みたい」のに「水が飲みたい」とは? いわゆる対象語	「新・日本語講座 2 日本文法の見えてくる本」	50- 3
信太 知子	「『水が飲みたい』と『水を飲みたい』という言い方」統紹——格助詞の発達と関連させて——	「佐伯梅友博士喜寿記念 国語学論集」	51-12

④ ヲとニ

伊藤 博	「に恋ふ」と「を恋ふ」	国語研究(白楊社) 32	34- 7
中西 宇一	自動詞と他動詞・格助詞「に」と「を」の対立を通して	女子大國文 76	50- 1
粕原 卓	格助詞「に」「を」と動詞「平家物語」を中心に	和歌山大教育学部紀要人文 28	54- 2

⑤ ニとへ

濱崎 徳	助詞に・へ・を図解の説	国民文学	12- 2, 3
菅木 伶子	「へ」と「に」の消長	国語学 24	31- 3
菅木 伶子	ニとへ	「講座現代語6 口語文法の問題点」	39- 1
佐治 圭三	「席につく」と「席へつく」	「口語文法講座3 ゆれている文法」	39-11
中沢 政雄	現代国語学(10)助詞「へ」と「に」の混同	国語教育科学 7- 4	41- 4
藤井 順子	格助詞「に」と「へ」の用法——上方淨瑠璃における作者の表現意識——	国語と教育 3	43- 7
原田 裕	「に」と「へ」の混用—近世初頭九州関係資料の場合—	「福田良輔教授退官記念論文集」	44-10
鈴木 敦子	助詞「に」「へ」「まで」 受付のアナウンスから	研修 175	50- 9

⑥ ニとト

阪倉 篤義	「がてら」 溯源	国語国文 18- 1	24- 4
此島 正年	助詞「に・と」の相関——万葉を主として	国語学 11	28- 1

松村 信美	謂はゆる転換の助詞「に」と「と」との考察——奈良・平安時代を中心に——	日本文学論究 24	39- 3
関 宣市	和歌における「…になる」と「…となる」とについて——時に関する体言に接続する場合——	鶴見女子大紀要 3	40-12
関 宣市	古代・中世の和歌における「一になる」と「一となる」とについて——時に関する体言以外の体言に接続する場合——	鶴見女子大紀要 4	42- 2
船渡川隆夫	「に」と「と」の違い——竹取物語の冒頭をめぐって	解釈 14- 3	43- 3
阿刀田稔子	てにをは随想(5)——「に」と「と」について——	たより 34	44-12
野原 三義	「百控琉歌」の助詞(2) 「に、と」など	国察大学国文学 2	昭46- 4
鈴木 泰	中古に於ける動詞「ナル」の用法と助詞「ニ・ト」の相関	国語と国文学 52- 2	50- 2
スワン彰子	〈となる〉と〈になる〉について	ILT News 66	54- 2
⑦ ニとデ			
新井 栄蔵	「場所」を示す場合の格助詞「に」と「で」をめぐって	日本語・日本文化 3 (大阪外語大)	47- 3
阿刀田稔子	てにをは随想(8)——「に」と「で」——	日本語教育研究 6	47-12
C松村 明	助詞の異同について	日本語 4- 3	19- 3
⑧ ヨリとカラ			
佐久間 鼎	現代日本語法四六——格助詞「より」と「から」	教育・国語教育	14- 2
小原 謙一	より・から考	言語生活 163	39- 4
小杉 商一	起点を示す「より」と「から」と	国学院雑誌 72-11	46-11
太田孝一郎	室町時代口語資料における助詞について 格助詞「より」と「から」をめぐって	国語研究(山形大) 23	48- 3
永井 啓子	言葉のしつけ 「より」と「から」	教室の窓中学国語 221	54- 1